



田畑益弘

WEB PAGE

太陽書房



# WEB PAGE

## 目次

2000年7月	5
2000年8月	27
2000年9月	52
2000年10月	75
2000年11月	100
2000年12月	124
2001年1月	147
2001年2月	164
2001年3月	176
2001年4月	199
2001年5月	220
2001年6月	234
2001年7月	251



2000年7月

梅雨半ば年半ばなる不如意かな

忘れむと忘れむとして明易き

意志強き蟻の急げる楸邨忌  
(加藤楸邨忌・7月3日)

楸邨忌正真正銘<sup>だいらつき</sup>大落暉

玻璃越しに涼しいひとと電算機

汝がくれし哀しみを抱く短き夜

火蛾も乗る都心のメトロ口終電車

画家若く清く貧しく青林檎

青林檎貧しき画家に描かるる

香水のかをりつよくて淋しさう

ハンカチに出でゆく船の速さかな

大阪にもつ焼きを食ふ暑気払ひ

明易き化粧なほして帰りけり

夕顔がしぼむと帰るひととゐる

泡盛に一期一会もうちとけて

まなかひにおほむらさきの一会かな

メロン出づ祇園のママの機嫌かな

端居して何かぶつぶつ言つてゐる

端居して諸行無常をふと思ふ

ひで  
早る街愛に飢ゑある如くなり

ぼうだ  
汗滂沱不意に虚しくなつて来し

汗にほふ男が女見つむるとき

額(ぬか)の汗なりはひの汗手で拭ふ

茄子(なす)の紺母の生家につながりぬ

火星にも水あるらしき涼しさよ

不器用な左手<sup>ゆんで</sup>いたはる青葉冷え

緑蔭に明眸皓齒際立つも

贈賄と収賄<sup>じよくしよ</sup>の間溽暑なる

炎天に鴉<sup>わら</sup>が哄ふばかりなり

恥多き古き日記も曝<sup>さら</sup>すかな

水弾く茄子の見事な臀<sup>しり</sup>である

自家製のトマトが好きな駐在なり

つばめの子口の数だけをりにけり

折角の海とて泳ぐ雨中かな

祭太鼓振向きふりむき古里発つ

日盛りを覗けばわたし一人かな

日盛りや蜥蜴の喉のんどひこひこと

眼が合つて割れてしまひぬシヤボン玉

けれんなき向日葵の黄を疎うとみけり

サルビアの静かに燃ゆる忌明かな

太白も月も涼しき未明なり

君孤独吾も孤独や青葡萄

肩抱けばうつむくひとよ百合の花

東山低く長刀鉾高し

月鉾の月の煌めく夕青空

月鉾の夜空に射手座なんちゆう南中す



船鉾の絢爛豪華たる座礁

はしなくもビールに酔ひて大男

はしなくも惚れてしまひぬ洗ひ髪

ほご  
反古焚いて西日を更に赫うせり

西日射す心の奥の<sup>ふか</sup>深傷かな

百日草しつかり咲いて月かはる

冷酒にて壊れてしまふ男かな

空蝉のつまるところは砕かるる

噴水の<sup>ほ</sup>秀の白日を眩しめり

日蔭蝶ふと木漏れ日にまぎれけり

蛇苺照るも<sup>かげ</sup>戻るも淋しき日

うなじ  
頂より衰へてゆく向日葵も

浜梨や夕日なだるる波幾重

水中花咲く夜も誰か泣いてゐる

もてあます五体満足昼寝せり

生くるもの死に群がれる盛夏かな

ゆくりなく人と生れし天の川

天の川来世は魚いおに生れ来む

冷房にひと日現世うつしよ忘れけり

冷房密室電脳と戯るる

無言とふ涼しさにあり老夫婦

蚤とつて猫にかまけて父老いぬ

炎昼の裏側昏らきマンホール

炎天下ダイナマイトでビル壊す